

# 千七百年の時を超えて

—王羲之の臨書「発展」 古典の文字を見て書く—より

二松學舎大學 非常勤講師 内田征志

## はじめに

現在、中学校国語科書写の授業の中で、古典の文字を見て書くことは、発展的な学習として必要に応じ展開されている。生徒一人ひとりが、自らの学習を深めたり広げたりすることは大切なことであり、文字に対する興味・関心を高める上でも、有効な手法であると考ええる。

本稿では、ここ数年の授業で実践してきたことを踏まえて、古典の文字を見て書く授業例を紹介する。当然、高等学校の書道科における「臨書」とは異なるので、高度にならず中学生に理解できる表現に留意した。

教材は光村図書「中学書写 二・三三年」「発展 古典の文字を見て書く」を使用した。書写で学習する文字は古典の文字

とかかわりがあることを知り、文字文化や伝統に対する関心や理解を深めることが重要である。本稿では王羲之の文字を例にとったが、学校の実態に応じて、作品の全体像がわかる資料を示すなどとして自由に文字を選ばせることも可能であろう。

教材「発展 古典の文字を見て書く」に取り上げられている作品は、千年以上前からの東アジア文化圏独自の伝統文化である。五十分×二回の短い授業時間ではあるが、同じ文字を書き味わうことによって、書の文化と歴史について生徒自らが興味をもって学習できるように努めたい。

## 指導の流れ

この学習の時期には、生徒たちは既に

目十一文字目の「流」を集字したものである。

## 「風」の筆使い

では、一文字目「風」の文字から詳しく見ていこう。

「風」の一画目。①紙の上部の方からごく自然に筆を入れていく。起筆の方向は、ほぼ四十五度の角度で入っている。この方向を間違えると送筆を引き出す力も変わってくるので注意しなければならない。閉じていた筆が開き(※)、筆管は、立ち気味にスツとまっすぐ下部に降りてくる。

②終筆は払うのではなく、外に張り出した力をグツと抑えながら開いた筆を静かに上部方向に抜きながら閉じていく。この呼吸を切らないように二画目へと入る。③起筆は閉じていた筆にだんだん筆圧をかけ始め、右上の転折部分へと向かっていく。④転折部分はしっかりと当たり、当たった反動を利用して⑤縦画の反りを生み出していく。

楷書・行書、また、それらに調和する仮名の学習は終えている。それら学習した文字は、文字が発生した約二五百年前から、中国や朝鮮、日本などの手書き文字(古典・名品)の変遷を継承して成り立っている。

また、学習してきた文字と古典や名品の文字には、点画の形や字体が違っているところがある。たとえば、ここで取り上げた「流」のつくりの部分である。このような特徴を確認しながら、先人たちの筆跡を鑑賞し、「臨書」させる。

今回は、王羲之(東晋時代)の書「蘭亭序」から「風流」の二文字(行書)を題材とした。行書は、点画のつながりが楷書と比較するとより見やすいのが特徴であることを生徒に振り返らせておきたい。

点画のつながりの呼吸やリズムは、書の性質や表情に深くかかわってくる。この王羲之の書を見ると、そのシャープさ、スマートさが伝わってくるであろう。この教材で示されている褚遂良、王鐸などの作品と比較しながら、運筆の呼吸やリズムによって、表現が多様化することもぜひここで学ばせたい。

古典を鑑賞するときには、細かに筆使いを見ていくのもよし、また、おおまか

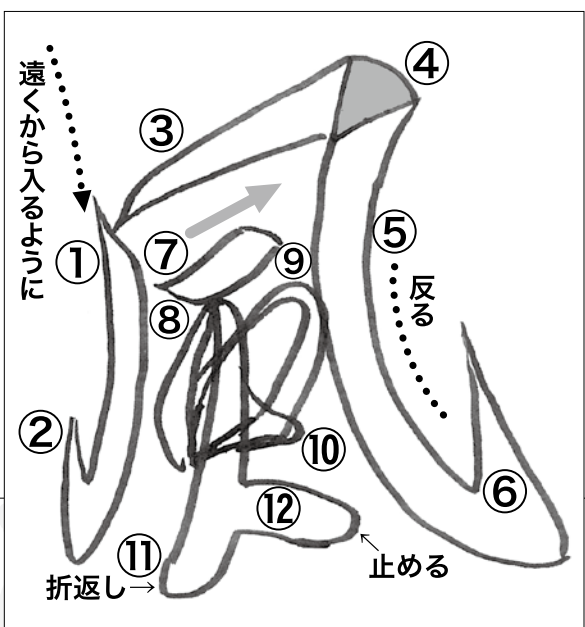
⑥終筆の跳ねは、開いた筆をごく自然に上部方向に閉じながら持ち上げていつているだけである。その際、思いっきり跳ねるといふようなことはしていない。この点は、はつきりと意識できるように指導していきたい。

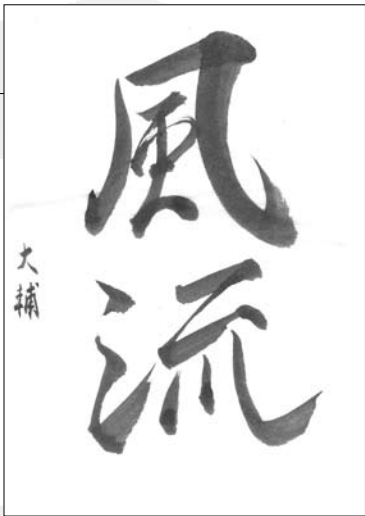
ここでの指導のポイントは、④の転折部分が要であることである。転折での当たりの強さが次画を呼び込むことである。二画目の跳ねの後、閉じた筆は外を空中で大きく回り、三画目に入る。

⑦「風」の三画目は、楷書などでは右上から左下へ払うよう学習しているが、ここに見られるような左から右への筆の運びについては、行書の特徴としてしっかり説明しておく。

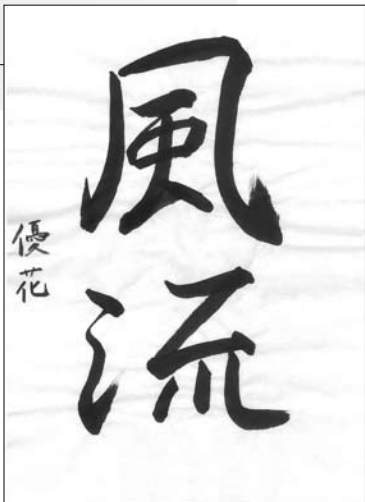
三画目の起筆は、閉じていた筆を左下から右上へ多少反る気持ちで、終筆まで一気に筆を開き、筆を開いた上下の動きを利用して筆を閉じ、そのまま四画目に入る。⑧三画目から四画目は、呼吸のつながりが実線となって表れているところなので注意を促す。

四画目で開いた筆の力を利用し五画目の曲線に移っていく。⑨五画目の曲線は、二画目の強い転折部分の当たりに呼応するものであることを理解させたい。





▶生徒の作品例



優花

⑩六画目の横画で、いったん五画目までの緩やかな流れは止め、横への直線で締めている。流動的な流れの中でこのようなりズムの変化はアクセントともなり重要である。

六画目の終筆で開いた筆をそのまま左上部方向に吊り上げ、七画目に入る。

⑪七画目では、起筆に六画目から受けた力の余韻が働いており、それを受ける形で縦線を引いている。筆圧は起筆から終筆にかけて段々かかってくる。

⑫八画目は、ひらがなの「へ」でも書くように線一本で省略している。しかし、その線一本にも表情があり、「開↓閉↓開」の筆の上下動が見られる。

「風」の一字だけ見ても、一画目から最終画まで確実に時間が流れていくことが、筆意を通してよくわかることをぜひとも生徒に伝えたい。

### 「流」の筆使い

次に、二文字目「流」を見てみよう。

①「流」の一画目の点。ただ漠然と点を打っていない。ひとつの点がどのようにな働きをしているか観察していかなければならない。

起筆で閉じていた筆が一気にパツと開

ているので、当然のことながら二文字目で反対の左下へ引つ張る力を強くしたい。さんずいの二画目は、重く運ぶと理に適ってくる。

「蘭亭序」全体を見ると、連続する一字一字にはそれぞれに必ず受け答えがある。筆の運びでは、深い後は浅く、早い後は遅く、強い後は弱く。その変化が形となって表れてくる。つまり王羲之の呼吸が文字に表れているのである。「風」から「流」の一画目に移るまでの間をどうするか。書道では、「筆脈」という専門用語があり、実線では見えないうが文字と文字のつながる空中での脈線があることをぜひ生徒たちに伝えたい。中学生には多少難しいかもしれないが、私が指導する授業では、「空中での舞の足跡が書である」と筆脈をたとえている。

き、開いた筆をごく自然に閉じている。

②二・三画目は繋がっている。

二画目は縦画一本で省略しているが、その太細の変化は筆の上下運動によるもの。紙面に筆を高くから落とし、その反動のバネを利用し、筆を閉じながら次の点に向かってガツンと筆を開き、③更に開いた筆の弾力を利用して右上部に跳ね上げる。このような筆の開閉にリズムがないと塗り絵のようになってしまう。

④三画目、閉じていた筆が一気に開き右上部の折部分でしっかりと当たり、その反動で

⑤左下への強い線を生み出している。左下での転折部分でもまた強く当たり返し、

⑥そのバネで少し力を抜き気味に右上部に運んでいる。抜いた筆は遠く回り、四画目の点へと向かう。

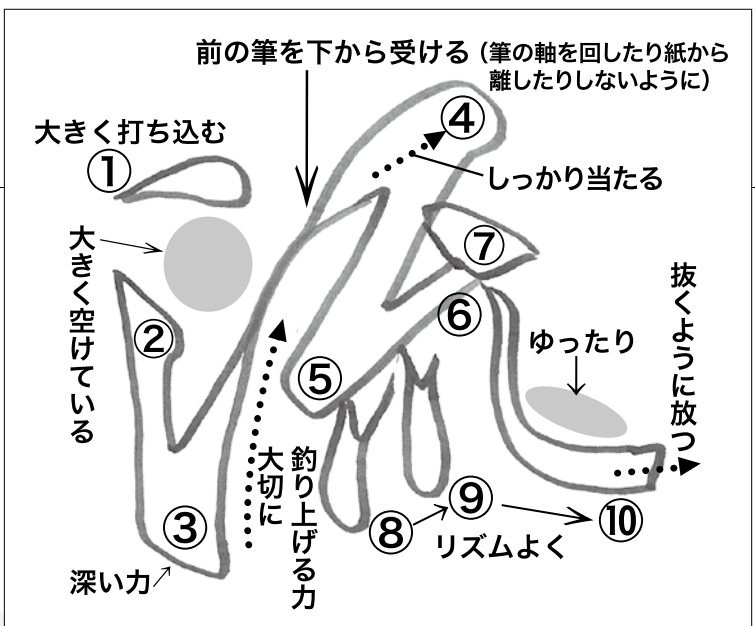
⑦この点は、外側まっすぐ、内側湾曲の姿。「閉↓開↓閉」で、⑧⑨五六画目はリズムよく「開↓開↓閉」。⑩七画目は、

生徒や学生の反応はさまざまだが、まさにこの一言に尽きる。その筆脈を斬ってしまうと、血があふれ出し、その書自体がなくなりになってしまう。

いうまでもなく、中学校の「書写」は高等学校での「書道」と目的も方法も異なる。中学生の授業では、何もこういう説明までする必要はないが、教師がそれをわきまえていれば、「ただ昔の人の字をなぞっただけ」という授業で終わってしまうことは避けられよう。

### 千七百年の時を超えて

王羲之は今から千七百年以上も前に生きていた人物である。しかし、彼が「書聖」と呼ばれ、今までその作品が受け継がれてきたことを、ぜひ生徒たちに教え



曲がった後、ゆっくり抜くように放つ。このような筆のバネとその上下運動はとても重要であり、「書の生命」の一部でもあるといえよう。

### 筆脈を考える

二文字の関係については、一字一画の「風」がかなり右上がりの力が強くなっ

てほしい。

「王羲之ってどんな人だったんだろう」などと問いかけながら、千七百年の時を超えて、同じ筆という筆記具を使い、同じ文字を書くという「書聖との共有体験」ができる喜びをぜひ指導してほしい。

書写の発展の授業とはいえ、筆を通してその時代の感覚や空間意識の高さを学ぶことは、敏感な生徒にとって限らない可能性を引き伸ばす。実際に、すばらしい臨書をしてくれる生徒には驚かされる。

古典の文字を見て書くことによって、千七百年以上も前の羲之の筆使いが、ごく自然であり、本当に正しい書であることが生徒に少しでも伝わればそれでよい。下書きの序文を一作品まで高めた羲之の姿勢、これこそ書写の原点ではないだろうか。

※「筆の開閉」

紙に対し、筆を上下に動かすこと。筆を下げたときが「開」、上げたときが「閉」の状態になる。